

ハープの進化と オーケストラでの用法の変化

佐伯茂樹

起源は古いが 曲の大半は近代以降

ハープの歴史は長い。紀元前3000年のメソポタミア文明やさらに古いエジプト文明の壁画に、その原始的な姿が描かれている。おそらく、他の弦楽器と同じように、狩猟用の弓の弦を弾いて音を出したのが起源であることは間違いないだろう。

ところが、ハープは、5000年近い長い歴史を持っているにもかかわらず、オーケストラで活躍する曲は近代以降のものが大半を占めており、モーツァルトやベートーヴェンの交響曲には使われていない。もちろん、彼らがハープを知らなかったわけではない。モーツァルトは、1778年に独奏ハープが大活躍する〈フルートとハープのための協奏曲ハ長調 K.299〉を作曲しているし、ベートーヴェンも、1801年に作曲したバレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉でハープを効果的に用いている。いったいどうして、ハープは、近代に

なるまで管弦楽で本格的に使われなかったのだろうか？ 実は、そこには、一見優雅に見えるハープという楽器が、機能面で鍵盤楽器に追いつこうと試行錯誤して、水面下でもがき苦しんだ過程が存在するのだ。

そこで、ここでは、ハープの機能面での発達と管弦楽での使用との関係にスポットを当てて辿ってみることにしよう。

吟遊詩人の 伴奏楽器で普及

現在の三角形の形をしたハープの直接のルーツは、10世紀ごろのアイランドやウェールズにあると言われている。ケルト人たちが歌の伴奏楽器として愛用し、やがては吟遊詩人の伴奏楽器として大陸へと広まっていった。ハープが持つ「伝説を語る吟遊詩人の楽器」というイメージは、この時代に由来するものだ。なお、「アイリッシュ・ハープ」や「ケルティック・ハープ」と

呼ばれる当時の楽器は、ピアノの白鍵に相当する音しか弦がなく、転調することができなかった。単純なコード進行の民謡や教会旋法を中心とした音楽では、それほど困らなかったからだろう。

しかし、16世紀に入るとポリフォニー音楽が複雑になり、さらに17世紀になって調性音楽が誕生すると、ハープにも、

ピアノの黒鍵に相当する半音の音が求められるようになった。そこで、ピアノの白鍵に相当する弦以外に黒鍵に相当する弦も張った「二重ハープ（アルパ・ドッピア。一般にルネサンス・ハープと呼ばれる）」がイタリアで開発される。このハープは、クラウディオ・モンテヴェルディ（1567～1643）が1607年に作曲したオペラ〈オルフェオ〉に指定されており、これがオーケストラにおけるもっとも早いハープの使用例である。

さらに、より多様な調性や転調が用いられるようになるバロック時代になると、二重ハープにもう1列白鍵に相当する弦を加えた「三重ハープ（一般にバロック・ハープと呼ばれる）」が使われるようになるのだが、技術の習得が困難で調弦も大変だという欠点があ



ルネサンス・ハープ
©写真提供=西山まりえ氏（ヒストリカル
ハープ奏者、本楽器所有）

バロック・ハープ
©写真提供=西山まりえ氏（ヒストリカルハープ奏
者、本楽器所有）

った。そこで、弦はシンプルに白鍵だけの数を張り、七つのペダルの操作で、それぞれ任意の音の弦の長さを短くして半音高くする機構を備えた「シングルアクション・ハープ」が開発され、ウィーンやパリの宮廷に伝えられた。ウィーンの宮廷からパリの宮廷に嫁いだマリー・アントワネット王妃がこの楽器を愛用したことで、パリの宮廷や貴族の間で大流行。このころに書かれたのが、モーツァルトの〈フルートとハープのための協奏曲〉である。

しかし、ようやくペダルが導入され自由な音階を手に入れたとは言え、ペダルを使わずにすべての調性に柔軟に対応できる鍵盤楽器には太刀打ちするのは不可能だ。18世紀後半になると、チェンバロに代わってピアノが台頭してきたので、操作面だけでなく、音量

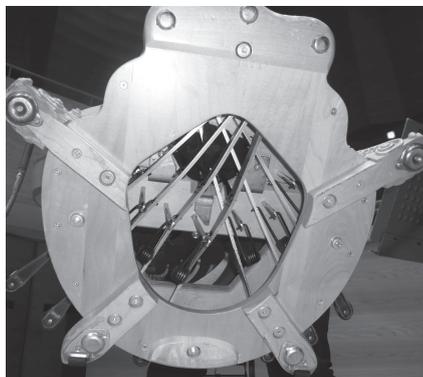
面でもハープは不利な立場に追い込まれたのである。

ペダル操作で 様々な調が可能に

このハープの危機に救いの手を差しのべたのは、ハープのライバル的存在であったピアノの製作者セバスチャン・エラールであった。彼は、1811年に、ペダルの操作によって、1本の弦の音を半音高くも半音低くもできる（正確に言うと、変ハ長調に調律された弦が、ペダルの操作で半音または全音高くすることができる）「ダブルアクション・ハープ」を開発。これによって、出すことができる音の組み合わせが格段に増え、近代ハープの特徴である「グリッサンド」を様々な調で演奏することが可能になった。1825年には、パリ高等音楽院にハープ科が創設され、ベルリオーズは〈幻想交響曲〉第2楽章「舞踏会」でハープを複数台指



七つのペダル（ダブルアクション・ハープ）



ハープの底、下側がペダルの部分。内部の仕組みが見える

定している。

〈幻想交響曲〉以降、フランスだけでなく、ドイツやオーストリアなどの作曲家たちもハープを用いるようになったが、多くの場合、「吟遊詩人がハープを弾きながら伝説を語る」というこの楽器のイメージを意識したものであった。16世紀の歌合戦を扱ったワーグナーの楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉では、その時代の雰囲気を出すために、小型でシンプルな「バックメッサー・ハープ」を用いている（現在は、アイリッシュ・ハープで代奏されることが多い）。

19世紀も終わりになり和声が複雑化してくると、フランスでは、それに対応するために白鍵の音の弦と黒鍵の音の弦を交錯させた「クロマティック・ハープ」も登場したが、結局、グリッサンドが得意な「ダブルアクション・ハープ」が生き残り現在に至っている。（ざえき しげき・音楽ライター／古楽器奏者）

ハープ奏者 井上美江子さん 「優雅そうに見えますが、実は……」

私は読売日本交響楽団でもう20年も弾かせてもらっています。良い仲間もいて読響が一番演奏しやすいし、素晴らしいオケだと思います。

オーケストラの中でハープに求められるのは、指揮者や他の奏者とのアンサンブルは言うまでもありませんが、音楽の場面に合わせて音量、音色などをきちんと使い分けることです。派手なソロの一方で、旋律の伴奏もあれば、打楽器のような効果音を出すこともあります。ハープは指揮者から遠くタイミングが遅くなりがちなので、テンポ感もとても大切です。

それから長い時間待つこと。たとえばブルックナーの交響曲第8番は、第2、3楽章に数小節あるだけですが、ものすごく目立つので緊張します。きちんと出られるよう休みを数えねばならないし、手も冷えてくるし……。待つのも楽ではありません。怖いのは本番中に弦が切れることでしょうか。演奏に支障をきたすのはもちろん、低い弦が切れると大きな音がしますから、メンテナンスは常に心がけています。

ほとんどの場合、ハープ演奏は一人です。ワーグナーの〈マイスタージンガー〉の前奏曲はハープの音が聴こえ



にくいですが、それでもオーケストラ全体の響きの中に音が溶け込み、余韻のような効果もあると思います。

優雅な楽器だと言われます。でも、実は足元のペダル操作は大変なんです。ペダルによって1本の弦で三つの音を出すので、ペダルが間違っていると、たとえば自分ではドを弾いたつもりなのに、楽器からは下のシャープの音が出てしまう。まったく違う調になってしまうので、何度もペダルを確認します。ペダル操作が手の動きより忙しい曲もあるんです。

ヒナステラのハープ協奏曲は、ペダルによる特殊奏法もあり、とても面白い曲です。演奏するメストレさんは男性でドレスではないから、複雑な足元の動きも見えますと思いますよ。（編集部）

◎トランペット

尹 千浩

Cheonho Yoon

オーケストラを巡る環境 日米で随分違いますね

「1月のプログラムは金管の活躍する大編成の曲が目立ちます」

ツェムリンスキーの〈人魚姫〉は聴くたびに何とも言えない世界に誘ってくれます。この曲が頻繁に演奏されるようになったのもここ30年ぐらいでしょうか。それから、ブルックナーの8番。金管奏者は「ブルックナーは体力的に大変できつい」と文句を言うのですが、きつい曲ほど楽しみにもなるという習性があります(笑)。演奏していて燃えますね。同じモチーフを際限なく繰り返し吹いていると、別世界にもっていかれるような感じもします。スクロヴァチェフスキのタクト、僕は初めてですがとても期待しています。チャイコフスキーの〈悲愴〉は、彼の交響曲の中では一番好きです。演奏しがいのある曲目ばかりですね。

「尹さんは韓国籍で、在日三世。横浜で生まれ育った。逗子開成高校から愛知県立芸術大に進学、米国オハイオ州のクリーヴランド音楽院に留学してト

ランペットの腕を磨いた」

両親が音楽好きで6歳ぐらいからヴァイオリンを習っていたのですが、中学のブラスバンド部に入ってトランペットを渡されたら最初から音が出て、感触も気に入りました。中3の終わりの頃には音大に進みたいと思ったんです。大きな転機は、愛知県芸の4年生の時、札幌で毎年恒例のパシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)に参加したことです。クリーヴランドから来たトランペッターと仲良くなった。僕は米国のブラスの響きが好きだったので、米国で学びたいと言ったら来いよと。翌年クリーヴランドへ。彼は今も友達です。

「その後、ロサンゼルスのコルバーン音楽院に進み、ウェストバージニア交響楽団、パークリー交響楽団などの正式団員に。読響には昨年5月のオーディションに合格して入団した」

読響はとても和やかでありつつ、音楽的にはかっちりしていますね。真面目で自分たちのフレームを維持しつつ、大きなうねりを作ろうとしている。向こうの楽団は、大胆さはあるが、仕事に対し極端にドライな部分や大雑把な面もあります。ただ、それが大きな成功を生んだりもするのですが。音



楽家としての意識の高さは同じで、演奏がそんなに違うとは思いません。

違うのはマネジメントですね。米国では個人の寄付の額が大きく、一般の人も経営に参画できます。セールスの仕方も違いますよ。日本の楽団が配っているようなチラシは、向こうじゃ見たことがない。それから、米国の楽団の労働組合はものすごく強くて、演奏家の権利意識が随分違います。

米国だと都市ごとに楽団があり、専用ホールもある。聴衆には地元の野球チームを応援するような感覚がありますね。演奏家もまた米国の野球選手と似ていて、よりレベルの高い楽団を目指してオーディションを受けます。僕も何十回も受けましたが、審査席の前

にはカーテンが張ってあって演奏者は絶対見えません。カーペットを敷いて足音で男女が分からないようにするほど徹底していました。

「トランペットの演奏で気を付けているのは？」

唇のテンション、息のスピードで同じ指でも音が変わりません。時々音が外れるように聴こえるのは指を間違えるというよりも(ということもありますが)、息や唇が原因であることが多い。発音という面でピアノの鍵盤のような確実性はないんで

す。長時間練習するととても疲れるし、体力も必要。それに加え精神力とか、集中力が大きく左右します。

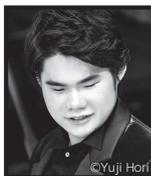
昔、大学の教授からオーケストラで吹きたければ「いい音」をまず持っていないではならないと言われました。テクニックも必要だが、いい音ありきだと。それはつまり、いい耳を持つということだったのかなとも思います。日々研究中ですが、目標とするのはまじりっけのない「オーガニック」な音です。そのためには音楽と向かい合う前に、体も心もいい状態ではなりません。野菜もそうですが、シンプルに見えて実はとても手間がかかる。だけど、それだけに一番おいしいものにもなるんですね。

常任指揮者カンブルランと辻井伸行が“夢の競演”

2/4 (木) 19:00 第589回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール **完売**

2/5 (金) 19:00 第21回 読響メトロポリタン・シロ
東京芸術劇場コンサートホール **完売**

2/6 (土) 14:00 第85回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール **完売**



辻井伸行

デュティユー:音色、空間、運動 ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第1番、交響曲 第6番〈田園〉
指揮:シルヴァン・カンブルラン ピアノ:辻井伸行

色彩の魔術師カンブルランが描く二つの《夜の音楽》

2/12 (金) 19:00 第555回 定期演奏会
サントリーホール

2/14 (日) 14:00 第184回東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール



シルヴァン・カンブルラン

モーツァルト:アイネ・クライネ・ナハトムジーク マラー:交響曲 第7番〈夜の歌〉
指揮:シルヴァン・カンブルラン

バロックから現代まで

輸入楽譜・音楽書のことならアカデミアへ



世界最大級・店内在庫常備 3 万点!

東京・本郷 創業 65 年 輸入楽譜専門店

アカデミア・ミュージック株式会社

〒113-0033 東京都文京区本郷 1-28-21 Tel.03-3813-6751(代) Fax.03-3818-4634

<https://www.academia-music.com/>



2 月 公演の聴きどころ

2月は常任指揮者のカンブルランが来日。4日、5日、6日はアンリ・デュティユーの〈音色、空間、運動〉、ベートーヴェンの交響曲第6番〈田園〉を披露する。2016年は現代フランスの代表的な作曲家デュティユー（1916～2013）の生誕100周年。常任指揮者カンブルランはデュティユー作品が得意で、一年でこの曲を含め三つの作品を演奏する予定だ。優美で独特の叙情性や神秘性を持つデュティユーを再評価する機会となるだろう。

また、ヴァン・クライバーン国際コンクール優勝を経て世界各地で活躍する辻井伸行がベートーヴェンのピアノ協奏曲第1番で独奏を務める。カンブルランと辻井は今回が初共演、どのような世界を繰り広げてくれるのか、期待が高まる。

12日と14日は、カンブルランが70分を超すマーラーの大作、交響曲第7番〈夜の歌〉を指揮する。近年、カンブルランと読響のマーラー演奏は非常に高い評価を得ており、今回も注目度が急上昇中だ。

印象的なテナー・ホルンのソロから始まる〈夜の歌〉は、マーラー特有の“明と暗”の響きが目まぐるしく交錯していく。この生と死の境を描いた〈夜の歌〉は、オーケストラの可能性の限りを尽くすかのごとく各楽器の多彩な奏法が随所にちりばめられ、趣の異なる複雑な要素が作品の中に詰め込まれている。

カンブルランは、この多様な解釈を許す作品を独自の鋭いセンスで読み込み、マーラーの大編成の響きに隠された数々の「仕掛け」をくっきりと浮かび上がらせるだろう。まるで暗闇の中に差す光のような透明な響きと、目映いばかりに鮮烈な音色を、存分にご堪能いただきたい。〈夜の歌〉ほど、“色彩の魔術師”と言われるカンブルランの手腕が活かされる作品もないだろう。

前半には、同じく“夜”を題名とするモーツァルトのセレナード第13番〈アイネ・クライネ・ナハトムジーク〉を披露する。カンブルランらしいウィットに富んだ組み合わせだ。この超有名曲もカンブルランの手にかかれば、新たな発見や驚きにあふれた演奏になるだろう。

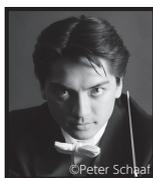
(文責:事務局)

新鋭ツイガンが振る〈アランフェス協奏曲〉&〈ボレロ〉

3/4 (金) 19:00 第22回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

3/6 (日) 14:00 第185回東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ビゼー：〈カルメン〉組曲から ファリャ：〈三角帽子〉第2組曲
ロドリゴ：アランフェス協奏曲 ラヴェル：ボレロ
指揮：ユージン・ツイガン ギター：朴 葵姫 (パク・キュヒ)



ユージン・ツイガン

ドイツの巨匠ツァグロゼクがブラームスで渾身のタクト

3/10 (木) 19:00 第590回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

3/12 (土) 14:00 第86回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ブラームス：悲劇的序曲 R.シュトラウス：メタモルフォーゼン
ブラームス：交響曲 第1番
指揮：ローター・ツァグロゼク

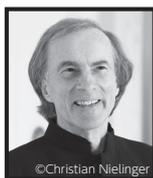


ローター・ツァグロゼク

円熟を深めたツァグロゼクが魅せる迫真の〈英雄〉

3/17 (木) 19:00 第556回 定期演奏会
サントリーホール

ベンジャミン：ダンス・フィギュアズ (日本初演)
コダーイ：組曲〈ハリー・ヤーノシュ〉 ベートーヴェン：交響曲 第3番〈英雄〉
指揮：ローター・ツァグロゼク



ローター・ツァグロゼク

入魂!“炎のコバケン”のチャイコフスキー〈1812年〉

3/24 (木) 19:00 第6回 東京オペラシティ名曲シリーズ
東京オペラシティ コンサートホール

モーツァルト：歌劇〈フィガロの結婚〉序曲、ピアノ協奏曲 第20番
チャイコフスキー：弦楽セレナード、大序曲〈1812年〉
指揮：小林研一郎 ピアノ：田部京子



小林研一郎

小林研一郎が導く魅惑の音絵巻〈シェエラザード〉

3/25 (金) 20:00 第13回 読響カレッジ
文京シビックホール ※19:30から解説

リムスキー=コルサコフ：交響組曲〈シェエラザード〉
指揮：小林研一郎 ナビゲーター：中井美穂



小林研一郎

絶美のハーモニー！フィンジの知られざる傑作を披露

4/14 (木) 19:00 第557回 定期演奏会
サントリーホール

池辺晋一郎：多年生のプレリユード
ベートーヴェン：交響曲 第2番
フィンジ：靈魂不滅の啓示
指揮：下野竜也 テノール：ロビン・トリッチュラー
合唱：二期会合唱団 (合唱指揮：富平恭平)



下野竜也

下野が冴える名曲選〈ヴォツェック〉&〈ジュピター〉

4/19 (火) 19:00 第591回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

ベルク (フォン・ボリス編)：パッサカリア
ベルク：歌劇〈ヴォツェック〉から3つの断章
モーツァルト：交響曲 第41番〈ジュピター〉
指揮：下野竜也 ソプラノ：エヴェリーナ・ドブラチェヴァ



エヴェリーナ・ドブラチェヴァ

世界へ羽ばたくヤマカズのチャイコフスキー〈悲愴〉

4/23 (土) 14:00 第186回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/24 (日) 14:00 第186回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

オネゲル：パシフィック 231
グリーグ：ピアノ協奏曲
チャイコフスキー：交響曲 第6番〈悲愴〉
指揮：山田和樹 ピアノ：小山実稚恵



山田和樹

ウィーン・フィルに衝撃デビューしたシャニの〈巨人〉

4/29 (金祝) 14:00 第87回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲
マーラー：交響曲 第1番〈巨人〉
指揮：ラ Haf・シャニ ヴァイオリン：佐藤俊介



ラ Haf・シャニ

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00~18:00/年中無休)
ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

ニューイヤー・スペシャル・コンサート 小林研一郎&読売日本交響楽団

■1/17(日) 14:00 なかのZERO 大ホール

指揮：小林研一郎 ヴァイオリン：藤原浜雄 ヴィオラ：田原綾子

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉序曲

ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲

ベートーヴェン／交響曲 第3番〈英雄〉

[料金] SS ¥4,300 S ¥3,800 A ¥3,300

[お問い合わせ] なかのZERO チケットセンター 03-3382-9990

セクスイハイム Presents

辻井伸行×三浦文彰 究極の協奏曲 **完売**

■2/16(火) 19:00 市川市文化会館 大ホール

2/17(水) 18:45 愛知県芸術劇場 コンサートホール

2/18(木)、2/19(金) 19:00 フェスティバルホール(大阪)

2/21(日) 14:00 岡山シンフォニーホール

2/22(月) 19:00 福岡シンフォニーホール

2/24(水)、2/25(木) 19:00 Bunkamura オーチャードホール

2/27(土) 14:00 よこすか芸術劇場

2/28(日) 15:00 栃木県総合文化センター メインホール

指揮：クリストファー・ウォーレン＝グリーン

ピアノ：辻井伸行 ヴァイオリン：三浦文彰

ラフマニノフ／ピアノ協奏曲 第2番

チャイコフスキー／ヴァイオリン協奏曲 ほか

※会場ごとにプログラム、料金、お問い合わせ先が異なります。詳細はオフィシャルサイト
(<http://avex.jp/classics/kyukyoku2015/>)

をご覧ください。

2016 都民芸術フェスティバル

■3/20(日) 14:00 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：下野竜也 ピアノ：小山実稚恵

ベートーヴェン／付随音楽〈アテネの廢墟〉序曲

ピアノ協奏曲 第4番

交響曲 第5番〈運命〉

[料金] A ¥3,800 B ¥2,800 C ¥1,800

[お問い合わせ] 日本演奏連盟事務局 03-3539-5131